あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第19回

21世紀の日本武道の行方

稲賀　繁美
（いなが しげみ／国際日本文化研究センター，
総合研究大学院大学）

《前口上》

芸術／美術とそれを包む制度を話題とする本誌の主旨からは，一見逸脱した題名に，あるいは違和感を覚える読者もあるだろう。だが徳川時代には『天狗芸術論』などという著作があり，ここで「芸術」とは，ほかならぬ兵法・剣術の事を指していた。欧米を見ても美術はFines Arts，武芸・武術はmartical artsでラテン語の《ars》を起点として共有している。本連載の最初に見たとおり，そのなかからFine Artsが高貴な精神活動として分岐し，社会制度として確立する背景には，ルネサンスから，絶対王制下でのアカデミーの確立，さらには啓蒙の時代における人間の精神的能力の肯定，そしてロマン主義による芸術家の個性の尊重といった，数世紀にわたる社会価値・制度の変動があった。翻って明治期の日本で，なぜFines Artsは美芸・美道とは訳されず「美術」として定着し，その傍らで武芸・武術が「武道」として近代化されたのか，も問いなおされるべきだろう。

最後に，日本文化の顕著な輸出産業となっている武道の現在に批判的な分析を加えることは，パフォーマンスを含む現代芸術／美術における《国際化》と，そこに孕まれた近代の桎梏ーとりわけ発信源の国籍あるいは文化性・民族性の問題ーを問い直すうえでも，無意味ではないだろう。むしろ武道の世界と美　術の世界とが，まるでお互いに無関係と信じ，相互に無関心なままでいることの危うさ，さらには，文部科学省，通商産業省，文化庁など行政の管轄によって縦割りにされ，相互の抱える共通の問題にかんして，まったく意志疎通を欠いてきた関係者の意識覚醒のためにも，ここで一度「武道」の現在を問うてみたい。以下，国際日本文化研究センターで開催された『21世紀の日本武道の行方 過去・現在・未来』(2003年11月18-22日)席上における，筆者の即興のコメントを採録する。同シンポジウムの報告書は，追って公刊される予定である。

異文化摩擦と武道

モロッコのラバトに指導に出向いた，パリ在住の日本人空手師範（松濤会）から伺った話がある。稽古の最初に道場の正面に向かって礼をしようとしたところ，受講生たちの拒絶にあった。自分たちは，唯一アッラーの神に対しては額ずくが，それ以外の対象に礼をすることは，教えに抵触するのだ，と。果たして稽古場の神棚に一礼するのと，アッラーの神を礼拝するのが，同一の行為なのか否か，これは面倒な神学議論を招き兼ねない。だがここには，武道の海外振興が直面するひとつの困難が，端的に露呈している。果たして日本の習慣を海外でも貫徹すべきなのか，それとも海外の派遣先では，地元の宗教・風俗に配慮すべきなのか*。

似たような例は，なにもイスラーム教国でなくとも，隣国の韓国ですぐにも体験で

「21世紀の日本武道の行方」『あいだ』96号、2003年12月20日、29-33頁

きる。韓国にも合気道は普及しているが，通常彼の地の体育大学では，体育館で靴を脱がない。いわば土足のまま道場に上がり込み，泥や砂の感触を味わいながら稽古することになる。道場を神聖視して，それゆえ（？）靴を脱ぐという風習は，儒教国であるはずの韓国にあって，すでに共有されない「特殊日本的」な価値観だった。剣道の世界でも，韓国の躍進が著しいが，1977年に李虎岩が大韓剣道会長に提起した「袴に関する建議書」の一件がある。ソウル大学校の羅永一教授も報告したように，これは「古典的で偏狭な日本美」の象徴である日本の「袴」着用をやめ，韓国のズボンたる「パジ」を着用することこそ，「日本剣道」ではなく「国際剣道」を追求するうえで，相応しい選択だ，との主張だった。ここには，「日本武道」の国際普及（即ち宗主国による《宣教》）と，「武道」の国際化=《脱日本化》との分岐点が見えている。「剣道」は好きだが，別に日本人になりたくて剣道をやっているのではない，という愛好者も多い。そしてふと気づけば，剣道防具や竹刀の生産主体は，既に台湾や韓国にスピンアウトしている。

阿部哲也氏は，ハンガリーで11年にわたって剣道の指導に携わってきた。その経験から，近年，海外における武道の指導において，文化摩擦と形容できる問題が噴出している，と指摘する。とりわけ日本側指導者に対して，現地側からの批判が囂しく，日本人指導者排斥という状況まで発生しているのに，阿部氏は強い危機感を表明した。得てして日本人指導者の技術説明は論理的明晰さに欠ける。それでも立ち合いで日本人が勝っているならまだしも，現地に優秀な弟子が育ち，日本人範士が負けたりするようになれば，権威が失墜する。ここで突然「正しい剣道」なるものが登場し，「強い剣道」を糾弾する論調が現れる。だが「実力」を伴わない抽象的な精神論は，説得力を欠き，かえって日本人指導者への信頼を損なうだろう。

海外進出と武道の危機

これらの逸話からは，武道の海外進出の孕む幾重もの問題が炙り出されてくる。まず御家芸の失墜について。

（1）およそ芸事には共通する傾向だが，煩瑣な規則への拘泥や，無意味な規範の横行は，指導陣に実力者が払底した場合か，受講者の激増に無理やり対処しようとする場合に発生しがちだ。そして悪いことにこの両者は，当該の芸事が組織として発展する段階で，えてして同時に発生する。

（2）加えて，国内で稽古をする限り，一々理屈をつける必要もない習慣も，ひとたび海外に出ると，質問攻めに会う。なぜそうしなければいけないのか，その必然性を言語化して説明しなければ受け入れてもらえない。海外での日本語教育が敬語の教授で遭遇したのと同様の困難を，武道の海外指導者も体験している。

（3）ここには翻訳の問題も加わる。日本の高名な指導者は，現地の言語を解さぬまま現地指導を行う場合が多い。筆者も，山口清吾師範が，もと弟子のクリスチャン・ティシエの通訳で合気道の指導する場面にフランスで立ち会ったことがある。ティシエが日本人師範の言葉をフランス人に理解可能な説明へと置き換えてゆく様は，まことに見事だった。また遠目に山口師範の動きを見ただけで，翌日からは体捌きに格段の進歩を示した有段者もあって，その感化の深さには驚嘆もした。ただ問題なのは，日本側指導陣の多くが，翻訳過程でどのような（語彙あるいは説明原理の）置換が発生しているかにまったく無知なまま，自分たちの意図がそのまま，同一の土俵に立って理解・伝達されたもの，と素朴に信じてしまう安易さにあろう。

武道とその言語的説明のアポリア

実は，同様のすれ違いは，至るところで発生している。江戸時代初期以来，武芸者は，自分たちの言葉足らずを儒学者や禅宗

の僧侶，あるいは神官らの学識によって補ってもらう場合が多かった。仏教用語の不動心，無心，無我，あるいは禅語の剣刃上といった語句が，そのなかで選択された。だが伝書に見られるこうした語彙は，表現のうえでは同一であろうとも，拝借元の学識経験者側から眺めたのと，そこに自らの体感を投影した武芸者の側から見たのとでは，その内実はおおきく乖離していたことも多いだろう。反対に，武道関係の書物の英訳などを見ると，日本語原文では単なる技法上の解説に過ぎなかった文章が，明らかに鈴木大拙流の禅理解にそって，色づけられて（誤）訳されている例に頻繁にお目にかかる。そこには，訳者の学識のひけらかし，あるいは過剰解釈が，翻訳書読者の，《東洋の神秘》への期待の地平にもあらかじめ見合っていて，相互に増幅される，といった状況が透けて見える。その端的な例が，阿波研造とオイゲン・ヘリゲルの出会いで発生したらしいことは，つとに山田奨治氏の指摘したところだ。暗闇のなかで２本の矢を射ると，１本目の矢筈に２本目の簇が突き刺さった。この奇跡を見て，『弓と禅』のヘリゲルは，無我の射，「それが射た」の実現と解釈したが，阿波にとっては，この一件，自分の武器を自分で壊すという，失策でしかなかったはずだ。

近代武道の桎梏

卓越した師匠の圧倒的な力量や説明不可能な妙技を，次世代はなんとか合理的に説明し，伝達可能なものに定式化しようとする。合気道の場合で見るなら，開祖，植芝盛平が技の分析的な解説をまったく施さず，その日の気分で稽古をつけたのに対し，その戦前から内弟子に準ずる立場にあった養神館の塩田剛三は，接触時の間合いを強調して構えを導入しているし，本部道場長を務めた藤平光一は，技の理合いを合理的に説明し，後に心身統一合気道を唱えた。前者が警察関係に人脈を広げ，後者がハワイ支部の発展に寄与したことからも，技法の分析的な教程化が，速成の技能習得や，海外への普及において，とりわけ歓迎された様子が推察できる。だが技の様式化はまた形骸化とも繋がりやすい。そして実は，近代の柔道，剣道の最大の問題もまた，おそらくはこの合理的，分析的な技の理解に潜んでいた。

寒川恒夫早稲田大学教授も指摘したように，嘉納治五郎の柔道は，明治16年に文部省が剣術と柔術の体操正科としての適不適を諮問したことに由来している。翌年の答申で，医学と教授法の見地から，柔術と剣術は体操正科として不適との結論が示されたが，ここで不適と判断された問題点を虱潰しに潰すことで確立されたのが，明治22年に嘉納の提唱した柔道体育法だった。ここで，投げる寸前でとめる「柔道体操法」（掛稽古）や，投げを目的とする「柔道体育法乱取」が提唱される。関節技をともなう投げ技，当て身や関節固め技の大半が，除外された。安全性を確保し，試合形式に馴染む技法に限定することで，柔道は見事に西欧近代社会のスポーツに仲間入りできる種目となった。「乱取り」から排除された危険な柔術技法も「柔道勝負法」に温存されてはいたが，こちらは結局その後，競技柔道の流れのなかで衰退して，顧みられなくなってゆく。その限りで，近代柔道とは，明治の教育界の要請にそって洋風に洗練された，すこぶるバタ臭い，新規設立の体育競技だったといって間違いない。

危機に直面しての思考停止

さて競技化の進展とともに，柔道や剣道は，とりわけ第２次世界大戦後になって国際的な飛躍を遂げた。国際柔道連盟は1951年に設立されたが，ここでは，体重別制度（1961），「有効・効果」の導入（1973），国際柔道連盟による段位認定（1981），ブルー柔道着の導入（1997）などが，いずれも日本柔道連盟の反対にもかかわらず可決されて現在に至っている。「有効・効果」など小手先のポイント稼ぎが競技の中心となり，ま

た体重別の枠内での筋力トレーニングが励行されるなど，「柔よく剛を制す」からは程遠いのが，近年の競技の実態となっている。そのなかで「見事な一本」の再評価などが訴えられている（村田直樹氏 講道館）が，そもそも競技柔道の出発点となった「投げ」の自己目的化，そして「一本」至上主義が，なぜ「投げ」なのか，「一本」とは何なのか，といった問いかけを，かえって遠ざける思考停止を招いている。

剣道の場合にも「気剣体一致の有効打突」という言葉が語らえるが（大矢 稔／国際武道大学），試合のなかでこの理念の実現を，いかにして審判が客観的に判別できるのか。まさか気，剣，体それぞれに何ポイントかを，さらにその三者の「一致」に何ポイントかを認定する，とは参らぬ以上，判断は多分に審判の主観に委ねるほかない。フェンシング競技のように，剣先の身体への接触の先後を電気で測定することには，無軌道な太刀筋でちょっと触った程度の技が有効と判定されることへの警戒からか，なお抵抗もあるようだ。しかし，真剣での駆け引きならば，指一本落とせばまず勝負は着くし，手首の頸動脈を切断されれば，それだけで致命傷となる。強い相手に対しては，何でもよいからまず先に傷を負わせるのが先決，とする秘伝書もある。とすれば「一本」は，実践的な裏打ちも，技能的な合理性もなく，あくまで試合のなかで培われた価値観，あるいは美意識としてしか説明できない限界をもつ。さらに蹲居の姿勢からすぐに打ち合いに入る現在の試合形式は，八-九歩の間合いから相手を見据えて間合いを詰める局面を，最初から脱落させている。古流の型などを多少稽古すればわかるとおり，この遠間からの詰めには，心技体いずれも大変な充実と高度の総合的判断力が要求される。現在の竹刀剣道試合は，この重要な局面を捨象する一方，鍔競り技や組み討ちも，六段以上の高段者にしか昇段資格の必須教程として課していない。日本剣道型の稽古だけで，これらの多様な動きを体得している剣士はごく少数だろう。

翻って柔道の「一本」は，今日の立ち技では，レスリング同様に両肩から同時に落ちることを判定基準としており，それに影響されて，投げ技や攻防そのものが大きく変質を被っている。もろ手刈りにたいして，下肢を堅く緊張させて後ろに投げ出すことで凌ぐ「剛道」の傾向。投げ技で落下しても，肩を畳に付けないために，あえて受け身を取らず，わざとうつ伏せで着地して，膝を痛めたり，といった本末転倒は枚挙に暇がない。そもそも柔術であれば，安全に受け身の取れる投げなど，実践的には無意味であり，投げのあとでは相手の動きを封じ込めるために，固め技に移行し，関節の脱臼・骨折をまねく関節技で仕留めるのが，当然だった。こうしてみれば，柔道にあっても，「投げ」そして「一本勝ち」は，試合の規則のなかでしか意味をもち得ない，その限りであくまで「虚構」としての目標であることが，再確認される。

武道本質論の陥穽

こうした試合至上主義の価値観にあって，お膝下の権威が「外人部隊」の実力によって揺らぎ始めると，必ず出現するのが，「武道の正しい理解」や（日本）武道の本質をめぐる議論である。だが嘉納治五郎の精神に戻れと号令を掛け，武道憲章（日本武道協議会 1987）の精神を貴ぶといった姿勢を示すだけでは，身内の内通者（これには日本国籍者以外も当然含まれる）が，同一の価値観を共有していることを確認して頷き合い，安心しているに過ぎず，武道の国際化に対応してゆくには，あまりに不十分だろう。国際化とは，日本の価値観とは相容れない価値観との対峙・止揚を含む過程だからだ。北欧の人と手合わせをして，アジア人ならありえないリーチからパンチを食らって驚いたり，黒アフリカ出身者の跳躍力に驚嘆することから，遡って日本に発達した武術の術理を考え直してはどうだろう。以下，その基本的論点を手短に復習するに止めるが，5点ほど指摘しておきたい。

（1）まず，自らの正統性を声高に叫ぶのは，多くの場合，その正統性が外部からの圧力によって危機に瀕した際の，反動的保身あるいは防御反応でありがちなことを確認したい。

（2）次に，（日本）武道とは何かという問いは，あくまでそれを当然とはしない異質な価値観との接触において，改めて問い直されたことを忘れまい。イスラーム圏での礼の拒絶や，韓国での土足道場の実態は，翻って，日本の武道の特質を浮き彫りにしてくれる，貴重な教訓である。自明としていた前提が崩されたときに，それに感情的に反発するのではなく，その教訓を手掛かりに，なぜ道場で神棚に柏手を打ち，床を掃き清めるのかを問い直し，それを納得できる言葉で，海外の同好者に説明する努力を傾けるところから，国際化は始まるだろう。また納得が得られない場合（イスラーム圏や韓国で神道への理解を求めるのは至難），力ずくの覇権主義で同意を取り付けるのは，「戈を止める」，という漢字の「武」の根本精神に逆らう自己矛盾を犯すことになる。文化摩擦を，解消すべき障害と見る替わりに，むしろ文化摩擦をお手合わせとして楽しみ，そこから新しい関係を築いてゆくことが大切だろう。

（3）文化は越境すれば，必然的に変質してゆく。武道も輸出商品・輸出産業のひとつと見るならば，輸入さきでそれがどのように消費され，利用されるかは，予測を越える。

生産者側が製造物責任を問われる北米式の文化土壌と，反対に消費者にも相応の使用責任があるとする欧州型の価値観とでは，すでに日本の武道関係者が果たすべき責任も異質となる。そのなかで，国際的に通用する「武道」とは別に，日本固有の「日本武道」を再定義する《内向き志向》もあれば，逆に発祥の地のパテント擁護とその「正しい世界的発展」に貢献することをもって使命とする，「伝道師」志向もあるだろう。だがそのいずれもが，既得権への外からの侵害に対して自己防御にこれ務める立場ならば，そこには家元の社会学を見て取る必要があろう。

（4）なかでも「道」を強調することが，しばしば家元における再生産過程での，「術」の次元の形骸化を繕うお題目でしかないことに注意したい。勝つのが目的ではなくて精神の修養こそが大切だ，といった議論は，えてして，未熟な技の言い訳，内容に欠けた空虚の権威維持の便法に過ぎない場合が少なくない。武道なり武術を，空疎な神秘主義の帳の内に隠すような選択は，合理的な説明を省略した，居丈高な国粋主義の覇権論の裏返しでしかあるまい。

（5）むしろ異文化理解，異文化交渉を言うならば，異文化と切り結ぶことで，そこからより高い境地を磨いてゆく機会としたい。武道，武術とは，けっして一部の人間が国の宝として崇め奉る信仰の対象ではない。むしろ「武」とは，対峙する両者あるいは異文化間の（身体的あるいは精神的）接触を司る媒体であり，媒介装置としての「武」を仲立ちにして，文化間の相互理解を練ってゆくべきなのだから。

＊田中逸平『回教及回教問題』（東方書院，昭和10＝1935＝年6月15日発行）には，有賀文八郎「日本に於けるイスラム教」が収められているが，そこで有賀は仏教やキリスト教を「大和魂」の「我が国民性に一致せぬ」ものとして退ける一方，「神祖天の御柱の尊と，イスラム教のアラーの神とは，同じ神様」を唱えている（同書24ページ）。本書の無軌道，狂信を嗤うのは容易だが，70年後の今日なお，なんら代替案が発案されていないことも事実である（鈴木貞美氏の教示による）。

＊＊以上は，国際日本文化研究センター 第23回国際研究集会 『21世紀の日本武道の行方』 2003年11月18-22日，における筆者の発言を要約したもの。広く国際文化交流に興味をお持ちの読者から，さまざまなご批判をお待ちしたい。